

# 「Lani に何が起こったのか」 アイデンティティ によらない「多様性」の可能性

田口 朋子

## 1. YA 小説の多様性とその問題

「どのようにして、わたしたち教師は、人種や民族、階級、ジェンダーと性的指向、言語の違いを重んじるべく、教育することができるだろうか」(54)このように問うオハイオ大学の Jacqueline N. Glasgow は、ティーンエイジャー向けのヤングアダルト小説(以下、YA 小説)が、こうした多様性を教える助けになると考えている。なぜなら、YA 小説は「(生徒たちに)自分の抱いている世界観を自覚させ、それとは違う観点にも目を向けるようなコンテクストを提供する」からだと述べる。そのうえで Glasgow は、社会的問題を「白人と有色人」「男と女」「異性愛者とゲイ、レズビアン、バイセクシュアル」といった項目別に分類し、それぞれ推薦図書を挙げている。(55, 57)

このように考えるのは、もちろん、Glasgow だけではない。Marshall A George と Andi Stix が主張しているように授業での YA 小説の使用を提唱する英語教師は多く、英語教員団体である The National Council of Teachers of English なども多文化主義教材としての YA 小説を評価している。また、黒人の児童文学に与えられる Coretta Scott King Award やラテン系の Américas Book Award などは YA 小説も選考対象にしており、1989 年からはゲイやレズビアンの Lambda 文学賞も YA 部門を設置している。

こうした「多様性」との結びつきは、YA 小説がジャンルとして形成される過程で育まれてきた特徴の一つといえるかもしれない。実際、「YA 小説」という名称も市場も読者層も確立されていなかった 60 年代及以前のティーン向けの小説に、マイノリティの主人公が描かれるのはまれであったし、異性愛以外のセクシュアリティを主張するものも見当たらない。YA のこうした傾向について、YA 小説家の Robert Lipsyte は「(初期の YA 小説家の)感性は、市民権運動や反戦運動、女性運動などによって培われて」(13)おり、その影響下で

YA 小説が形成されてきたからだと述べている。

それでは、YA 小説はどのように「多様性」を描いてきたのだろうか。そこには批判すべき点があるだろうか。典型的な例を示すために、二本の小説を比較し紹介したい。YA 小説以前のティーン向け小説 Madeleine L'Engle の *The Small Rain* と、2004 年に National Book Award の YA 部門で最終選考に残った Julie Anne Peters の *Luna: A Novel* である。どちらの小説も男か女かわからないような規範的なジェンダーを帯びていない人物を登場させているのだが、この人物たちの語られ方に、YA 小説以前と以降での典型的な違いを見ることができる。

1945 年に出版された *The Small Rain* は、ピアニストを目指す主人公 Katherine の 10 歳から 18 歳までを描く小説である。このなかに、Katherine たちがゲイ・バーと思われる場所を訪れるシーンがある。男なのか女なのかかわからない異様な人物たちを目にし、Katherine がショックを受ける場面である。

驚いてもう一度その人を見ると、なるほどそれは女の人であった。いや、ひょっとしたらかつては女の人であったかもしれない。いまその人物 (creature) は男物のスーツにタイをつけ、髪は短くカットされ、死人のような白い顔に絶望したような瞳が光っている。(…)シルクのドレスを着て下手に髪を染めた太った女が、(…)スラックスを履いたブロンドの若い女と踊り始めた。(…)そして、彼女は Katherine に向かって意味ありげに微笑んで見せた。(311-312)

Katherine は殆ど恐怖を感じて、即座にその場を立ち去ると、「家でシャワーを浴び」て「あの雰囲気洗い落とす」(313) 必要を感じる。さらに、彼女の友だちはそのような場所に何度か行ったことがあると告白し、「でも、抜け出せてよかったよ。なかには抜け出さない人もいるからね」(313) と話している。このわずか 2 ページ程の出来事のなかで、男か女かわからない奇妙なもの (creature) たちは否定され捨て去られ、対照的に、主人公たちはこのような誤った存在の仕方を「洗い落とす」ことで成長しているのである。

一方で Peters の YA 小説 *Luna: A Novel* はどのような位置にあるだろうか。YA 小説が最盛期を迎える 80 年代後半になると、主人公の成長過程に、マイノリティのアイデンティティの承認が組み込まれた物語も増えていく。なかでも、異性愛主義的でないジェンダーやセクシュアリティを扱う小説は「カミングアウト

ト」と「承認」の物語になっていく。物語のなかで登場人物がゲイだとかレズビアンであるといった自覚を持ち、また、他の人物によってそのように承認されるのである。この系列に位置する、最も新しい小説の一つが *Luna: A Novel* である。

この小説は、15歳のReganが語り手となり、「兄」Liamが隠れて女装をしているのを知るところから始まる。実はこの「兄」は自分にLunaという女性名をつけ、トランスセクシュアルであると自覚し、性転換手術を希望しているのである。Reganがトランスジェンダーの歴史について調べている「兄」にその理由を聞くと、「兄」がはっきりと答える場面がある。

「だって、いつかわたしもその歴史の一部になるんだもの」(69)

物語はReganが「兄」を理解し受け入れる過程を追い、最後に性転換手術を目指して家を出ていく「兄/姉」を見送って終わる。

必ずしも同一視できないとはいえ、*The Small Rain*の不気味なバーにいたのなら、即座に排除されていたかもしれない人たちが、*Luna: A Novel*では自分の立場から発言し、アイデンティティをもち、周囲の人に承認されている。さらに言えば、*The Small Rain*の主人公たちは、正常なカテゴリーから外れるものを否定し排除することで自己を実現し、自分たちの共同体を維持していくのに対し、*Luna: A Novel*は、共同体のなかで、その分類システムにより否定されてきた立場の名誉回復とアイデンティティの項目としての承認を試みているといえる。

*Luna: A Novel*に見られるこうした傾向は、Annamarie Jagoseがセクシュアリティにおける「エスニック・モデル」と呼ぶ言説実践と言えよう。民族アイデンティティを基盤とする社会運動のように、ジェンダーやセクシュアリティという機軸に「ゲイ」や「レズビアン」というアイデンティティを確立させ、その立場の「承認と市民権を要求する」(61)姿勢である。YA小説においても、こうして承認すべきアイデンティティのカテゴリーに、いまや「トランスジェンダー」が追加されていると考えることができるのだ。

しかし、アイデンティティを基盤にするモデルには批判すべき点もある。Joan Scottは多文化主義をテーマにした論文のなかで、こうした「カテゴリーに拠る多様性」の問題を指摘している。Scottによると、カテゴリーに依拠する「多様性」とは「アイデンティティの複数性」であり、ここでのアイデンティティは不平等な歴史の表れではなく、項目の固定された参照リストにしかない(14)。したがって、カテゴリーに依拠する多文化主義は、マイノリティを構成

しかつ排除してきたそもそものシステムを問わないまま、マジョリティによるマイノリティの承認という一方通行のものに留まってしまふのだ。さらに、その過程でアイデンティティの項目として掬い取れない「アイデンティティ未満(過剰)」の何かが排除されていることに無関心になってしまう。

このようなカテゴリーの問題は、Glasgow たちの主張する多様性の特徴とその問題を端的に表しているようだ。Glassgow の社会問題リストに顕著なように、YA 小説における「多様性」は、文化や社会の周縁におかれてきたマイノリティのアイデンティティをカテゴリー別に承認し、寛容な態度を促進するものとして読まれてきた。このリストには、宗教、経済的格差、障害の有無など、承認すべき項目の一覧表がさらに加わっていくだろう。しかし一方で、こういったカテゴリー別の「多様性」はマジョリティのアイデンティティを規準にして問い直すことはなく、カテゴリーに納まらない「アイデンティティ未満(過剰)」の何かをあらかじめ排除してしまうという問題を常に内包しているのである。

それでは、アイデンティティのカテゴリーに依拠しない、別の角度からの「多様性」を展開することは可能であろうか。

2004 年に出版された Carol Plum-Ucci の *What Happened To Lani Garver* では、「アイデンティティがわからない人物」を登場させるという試みがなされている。承認できないアイデンティティを否定し洗い流す *The Small Rain* から、マイノリティのアイデンティティを承認する *Luna: A Novel* に至るまで、YA 小説の多様性の流れから見れば、アイデンティティを主張しないこの小説は明らかに異質である。ここに別の多様性の可能性を読み込むことができるだろうか。この小説がどのようにアイデンティティの主張を避け、登場人物たちを描写しているのかを考察することで検討していきたい。

## 2. 奇妙な存在を軸にする物語

「おい、あいつは女か？男か？」

「女に見えるなあ、そのわりには背が高すぎる気もするけど。ひょっとしたら、アンドロギュニスってやつかもしれないよ。」(12)

これは、Carol Plum-Ucci の二作目の YA 小説 *What Happened To Lani Garver* の一場面である。フィラデルフィア郊外の小さな町の高校で、物語の語り手である Claire を含む在校生たちが転入生の Lani を見て首をかしげているところだ。

ミステリーを基調にした1作目 *The Body of Christopher Creed* が Michael L. Printz Award の栄誉賞を受賞するなど、Plum-Ucci は YA 小説界ではすでに注目されている作家であり、二作目の本作品に対するレビューも多い。その多くは「超自然的な気配によって魅力が増している」といった Kirkus の書評や、「ハロウィーンにちなみ、ゾっとする物語特集」(Nissman) という紹介記事のように、本作品をミステリーというよりシュールリアルであると評価している。

その理由は、性別不明で「アンドロギュニスかもしれない」転入生の存在である。この転入生は「Lani」という性別中立な名前を持つばかりか、なぜか出生証明書がないまま養子となったので、性別や年齢の「真実」を証明する公的文書も、出生時を知る人物もいないことになっているのだ。語り手の Claire は Lani を初めて見て以下のように描写している。

肩と顔の釣り合いからして(性別の判断が)難しい。筋肉があるとはいえないけど、骨格が大きいせいで肩幅が広くみえる。それでも、顔を見れば思うだろう、間違いなく女。Geneva が言ったように、うっすらと化粧しているみたい。でも6インチ以内に近づいて見ると、これは化粧じゃなくて、本物の桃色の肌と濃すぎるくらいのまつ毛、自然な唇だって気づく。(…)ブッチの女の子に見えるか考えてみると、広い肩幅を抜かせば、そう見えなくない。でも、どちらかというといとゲイの男子に見えるかも。(13)

判断基準が登場人物たちのジェンダー観を表しているのは言うまでもないが、長めに引用したのは、まるで *The Small Rain* のバーにいる人々のように、Lani が一方的に視線に晒され推測の対象になっていることを示すためである。Stuart Hall は、「私たちの『常識的な枠組み』や『社会的な常識』に反し、私たちの経験に逆らうような新しく、解決の難しい厄介な出来事」は、理解される前に、「言説的推論的な領域に割り当てられる」(513) と言う。この説に沿って捉えようと、登場人物たちにとって Lani は理解可能な性別カテゴリーに入らず、彼らの「常識的な枠組」にそぐわないため、「アンドロギュニス」なのか「男か女か」あるいは「ブッチの女の子かも」と様々に推測が交錯せざるを得ない宙吊りの存在なのである。

さらに、登場人物たちが Lani に理解可能なカテゴリーをあてはめようとして

いる一方で、Lani 自身は意識的にカテゴリーを批判しカテゴリーから逃れようとしている。「女なのか」と問われて「あ、ごめん、女の子じゃない」(20)と返し(しかし、また「男である」とも言わず)、年齢を問われると「年齢に意味なんてないよ」(46)と答えている。Lani は家出や退学の常習者であるが、その理由は「男子が男子らしく、女子は女子らしくしなければいけないときはいつも、逃げ場所を探さなければならなかった」(46)からだと言う。トランスジェンダーであると主張する *Luna: A Novel* の登場人物とは違い、Lani はアイデンティティの主張がなく、しかしまた「女の子じゃない」「年齢に意味はない」と言う Lani は、*The Small Rain* で一つの発言も許されず排除された人々とも違う。Lani の存在は「そうではない」「どちらでもない」という否定と矛盾のうちにある、いわばカテゴリーによって登録されないもの、つまり「常識的な枠組み」で理解されない「カテゴリー未満(あるいは過剰)」であることを主張しているようだ。

Everyn Hammonds に習っていえば、Lani の存在はこの小説のブラックホールかもしれない。Hammonds は、アイデンティティのカテゴリが白人を規準にして構成されていることを指摘し、そうした言説では掬い取られない「不在/沈黙」である黒人女性のセクシュアリティを、ブラックホールに喩えている。というのも、ブラックホールはそれ自体では顕在化しないが、「周囲の星の変形」や、「エネルギー放出の変化」によって推察される存在だからだ。Hammonds は言説的に構成された「不在/沈黙」は、存在しないのではなく、ブラックホールのようにそれが位置する空間への影響によって推し量られると主張している。(149) 他の登場人物の推論の対象であり、存在はしているが「常識的な枠組」では分類はされず、また自分でも「他の人が反応しているだけで、自分は何にも誰にも働きかけてない」(Plum-Ucci 174) と語る Lani は、この意味でブラックホールのように、周囲に与える影響から捉えられる存在として読む必要があるだろう。

こうしてこの物語の構造が明らかになってくる。つまり、この小説は「常識的な枠組み」では収まらないこの奇妙な存在を軸にし、その周囲にいる登場人物の変化によって、それらの人物の抱いている「常識的な枠組み」を問い返す構造をもっていると考えられるのだ。それでは、この構造はどのように周囲を動かしているのだろうか。また、どのように「多様性」が可能なのだろうか。登場人物たちがたどる二つの分かれ道をなぞりながら考察したい。

### 3. 奇妙な何かを否定する

Lani という奇妙な存在の影響を受ける登場人物たちは二つに分かれる。一方は、この物語の語り手、17歳の Claire である。Claire はチアリーダーに属し、カフェテリアでは「クィーンズ・シート」を陣取る人気者グループの一員で、傍から見れば「雲ひとつない」高校生活を送っている。しかし、実際のところ彼女は健康面でも人間関係でも問題を抱えており、Lani が転入してくるときにはかなり不安定な生活を送っている。もう一方は、Claire の同級生たちで、Claire とともに「クィーンズ・シート」に座る Macy や Geneva、彼女たちと交際している Scott や Tony といった男子たちからなるグループである。物語の中心人物である Claire を見る前に、まずは脇役であるこの友人グループを考察してみよう。

彼らが Claire と最も異なる点は、Lani に対してすぐに判断を下すところである。Lani を目にして、彼らは「ありやいったいなんだ？」と疑問を抱くのだが、しかし、満足な回答は得られないので「ゲイの男子」であると決めてしまう。例えば、Macy は「ゲイがいけないってわけじゃないけど」と言いながら、「でも、あんな風に髪をブローしたり、腰を振って歩く必要ある？あれって練習の成果でしょ。ああやって宣伝しようとしてんのよ」(22)と非難を始めるのだ。Claire には腰を振っているようにさえ見えないのだが、Macy たちにはそう見える。彼女たちは自分たちの理解できる枠組み、すなわち異性愛主義の枠組みで Lani の存在を判断し、都合の良い解釈を採用していくのである。彼らはホモフォビックな態度で Lani をゲイだと決めつけると、暴力的なバッシングへと態度をエスカレートさせ、ついには事件まで起こす。ある夜、彼らは Lani を漁網に入れて海に突き落としてしまうのだ。The Small Rain の主人公がシャワーで「あの雰囲気」を洗い流したように、彼らは Lani を否定すべき対象と定め、洗い流そうとするのである。

しかし、彼らは正体不明のはずの Lani に何を見ていたのだろうか。なぜ「ゲイ」と判断し、しかも排除しようとするのだろうか。

竹村和子はアイデンティティの政治を議論するなかで、アイデンティティは自己承認と自己否認によって形成されると指摘している。これによると、承認可能なカテゴリーを保持するために、「自己の内部で承認されない不気味なもの」には、「否定される『何か』としての形象(名前)が与えられ、「否定さ

れる実体」(256)として存在させると言う。この小説の登場人物に関しても、この説が当てはまりそうだ。つまり彼らは、自分たちが承認できる異性愛主義的なアイデンティティを保持するために、自分のなかの「不気味なもの」の存在を刺激する Lani を否定していると読むことができる。特に、ホモフォビックな暴力については、「自分が望まないホモセクシュアルの欲望を刺激され、パニックや怒りで過剰反応するから」(Adams)だという説があるが、この説に合わせるように最も激しく攻撃する Tony が自己否認のゲイであるとすら示唆されている。

こうして物語は Lani という謎を中心に、その周囲の人々の「常識的な枠組み」を暴き出していくのだが、そのうえ、バッシングに加わったものたちには「罰」すら与えている。バッシングのさなか Lani が海に消え行方不明になるので、事件は公的には見過ごされてしまう。しかし、バッシングをした人たちはそれぞれ「不幸」に見舞われているのだ。Tony は飲酒運転と麻薬所持で逮捕され、のちに精神を病んで入院し、Vince は自殺して発見される。Phil は物事に興味を失い、退学して町の清掃車の仕事につく。Scott はガールフレンドが妊娠すると学校を中退して自動車修理工場に勤め、安アパートで生活し始める。Macy は理由もなくチアリーダーを辞め、孤立して過ごすようになる。語り手が事実を列挙するだけの抑えた口調で、逮捕や自殺だけでなく、就職や結婚までも同じように描写するので、これら全ては同じことを指しているようだ。つまり、彼らには今までの生活以上の変化はなく、この町から出ることも今まで属していたコミュニティから出ることもない。言い換えれば、自分の内部で否定しなければならぬ何かを Lani に投影して排除しているようであり、実はそれを自分のなかの奥深くまでさらに封じ込め、そのせいで結局は自分を束縛してしまうと示唆されているのだ。ここではアイデンティティに固執することがリスクとして捉えられるのである。

#### 4. 奇妙な何かを恐れる

閉鎖的なコミュニティに束縛される友人たちとは対照的な態度を取るのが、語り手であり中心人物の Claire である。彼女がどのような変化をしていくのか順にみていこう。

物語の始めに Lani が転入してきたときは、彼女は問題を抱え、抑圧された不安定な状態にある。白血病の経験がある彼女は、最近になって疲れやすくめま



いがするため再発を心配しているが、しかし、アルコール中毒の母親や離婚した父親には相談できない。また、後半で拒食症と診断されるのだが、彼女はダイエットにとりつかれており、少量しか食べないだけでなく、殆ど誰とも食事を共にできない。

こうしためまいや拒食症の描写は、彼女の存在の仕方と関連しているようだ。彼女がダイエットを始めたのは、チアリーディングの先生が自分を指して「身体が大きすぎる」と言うのを聞いてからだ、そのため彼女はこのように考えている。

わたしはいつものように目立たないようにチアリーダーをやった。つまり、できるだけ他の人の後ろに隠れたり、他の人から離れたり、なるべく動かないようにしていた。ダンジェロ先生はわたしに、前に出て覚えた動きを見せるように言ったけど、先生がみんなにわたしの牛っぷりを見せるために呼んだってわかっている(25)

このような恐れは、友人といるときも同じである。彼女は気晴らしにギターを弾き作曲をしているが、周りから異質と思われるのを恐れて内緒にしており、また、気分が悪いときでも「さっき Macy に親指から血が出てるのを見せてビックリさせたばかりなのに、そのうえ気を失いそうだななんて言えない」(24)と考えている。

こうしてみると、彼女が恐れているのは、自分の存在や言動が突出し「不適切」になることだといえよう。友人たちが Lani という「否定すべき実体」を排除しようとしているのとは反対に、彼女は自分に否定すべき奇妙な何かが見つかり排除されるのを恐れているのだ。ギターの秘密もダイエットも、自分が存在を許されている範囲から出ないための努力であり、彼女の症状は、その努力ゆえに自己が侵害された症状でもある。彼女は「不適切」にならないようにダイエットをしているが、そのために一層疲れやすく、めまいを起し嘔吐する。そのうえ周囲の人と食事を共有しないという矛盾にも陥っているのだ。

しかし、そうまでして彼女はどこに留まろうとしているのか。これに関しては、物語の冒頭にヒントがある。冒頭で彼女はアルバムを眺めているが、写真にはそれぞれにタイトルがつけられている。撮影時のエピソードにちなんで、Macy や Geneva がつけた他愛のないタイトルであるが、そこに Claire 自身がつ

けたタイトルはなく、彼女はそれを眺めているだけである。これが示していることは象徴的なようだ。彼女がなんとかして存在し続けようとしているのは、他人の視点によって構成された社会なのだ。Macy たちが積極的にこの社会構成に関わっているのに比べ、彼女は割り振られた役にしがみついているだけなのである。

こうして捉えると、物語の「解決」は Claire が自分の恐れを自覚し、抑圧されていた「別の自分」を見つけ出し / 取り戻し、自分らしさのバランスを見出すことだといえよう。そして、もちろん、Claire が現状を打破し自分らしさを手に入れる契機が、奇妙な存在である Lani と親しくなることなのである。

## 5. 奇妙な何かをもてなす

Lani と親しくなることで、結果的に Claire には三つの象徴的なことが起きる。病院に行き検査を受けること、音楽活動を始めること、そして今まで自分が着るとは思ってもみなかったレザージャケットを手に入れることである。これらのことはすべて Claire の自己認識に関係しているようだ。つまり、彼女は自分の状況を配慮し、新しい自己像を手に入れ、自分の欲求も恐れなくなったと読むことができる。そのうえ、Lani に連れられた病院で、家出少年や美術学校の生徒といった自分とは異なる生活を送る同年代の友達もできる。新しい世界を受け入れ尊重することに褒美を与えている点で、Claire は Glasgow らの主張する多文化主義そのものを実践しているかのようである。

しかしこの小説が強調しているのは、このような結果につながる Claire の Lani への関わり方である。彼女は Lani のアイデンティティを問い詰めるのではなく、自分自身に目を向け「自分がピンチに陥ってるなんて考えたことなかった」(35) だとか、「自分にブッチっぽさがあるなんて、気づきもしなかった」(59) などと考え始めるのだ。こうした彼女の態度と、Macy や Scott といった友人たちのとった態度との違いは明らかであろう。Lani を排除すべき対象として断定するのではなく、Lani のアイデンティティを追求するのではない。何者かわからない他者との関係で、まるで鏡を見るように自分のあり方を問い直し、その問い直しのうちに自分のなかの奇妙な存在をも受け入れようとしているのだ。

竹村和子はアイデンティティの問題を議論するなかで、他者を排除することで維持されるアイデンティティの問題と、その体制を変化させる可能性につい

て、「他者のもてなし」という観点から述べている。竹村によると、既存のアイデンティティの体制をずらすような活動とは、「自己の『あいだ』の内主体的な行為として」実践化されるべきことであり、そうして「自分自身を中断し、分裂させる」ことが「(他者を)もてなすための条件」(259)であると述べる。そうであれば、Claire が取った態度はまさに「もてなし」の態度といえるのではないだろうか。

ところで、Lani と親しくなるときに起きることを考えると、「自分自身を中断し、分裂させる」ことはかなり困難なことのようだ。例えば、めまいを起こした Claire が Lani に助けられる場面がある。めまいと嘔吐感のなかで Lani と会話をしているうちに、彼女はいつのまにか自分の境遇や心配事について打ち明けていくのだ。Lani はそれを聞きながら「つまり、お母さんにもお父さんにも、友だちにも言えないんだね」(35)といった風に、Claire が口にする断片を別の言葉で表して聞かせ、まるでセラピーのように、漠然とした不安を言語化していく。Claire はこのうちに気を失ってしまうのである。

症状を意味のあるものとして捉えれば、このめまいのなかにコミュニティのなかに存在できる「承認可能な自分」と、そのために抑圧されてきた「承認できない自分」との葛藤が浮上しているようだ。Claire の古い自分は分裂して崩れ、言語化されて吐き出され、気を失って目覚めると新しい自分へと生まれ変わると読むことができよう。常識的な枠組みでは解釈できない「奇妙な何か(他者/自己)」と向き合うことはかくも困難なことであるのだ。しかしまた、このような葛藤を経験したからこそ、彼女は病院で検査を受け、音楽活動を始め世界を広げていくのだ。ここでもまた Claire と友人たちとの違いは明確である。

## 6. 「Lani に何が起こったのか」の奇妙さについて

「常識的な枠組み」に当てはまらない人物を登場させながら、排除するのでも拒絶するのでもなく、また承認すべきアイデンティティとして浮上させてもいない。Lani のアイデンティティをわからないものとして保留にしたまま、小説の焦点はこの謎の人物の周りにはいる他の登場人物に向かっている。Lani に関する謎は、いわば、周囲の人物を試すものであり、また彼らを人生の次の段階に転送するような装置といえる。これにより、Claire は新しい生活への希望に生き、Macy や Scott たちは今までの生活に束縛されていくのだ。こうしてこの小説はアイデンティティを基盤にした多様性を主張するのではなく、他者をも

てなす態度を、賞罰という単純化された二分法により抽出していると考えられる。

しかし、周囲の人物が注目される一方で、Laniは何者だったのだろうか。最後にこのLaniの存在(あるいは、存在のなさ)を、Claireと関係づけて再考してみたい。前述の通り、LaniはClaireが自己機能のバランスを失う限界にあったときに登場しており、姿を消すのはClaireが「別の自分」を見出し、バランスを手に入れるときである。これはまたClaireが社会との妥協点を見出したときでもある。というのも、Claireが道連れとなって海へ投げ出される理由が、Laniの言うように「妥協点を見出せなかったせい」(264)であるなら、彼女が海から脱出できるのは「妥協点を見出した」と読めるからである。そうであれば、この場面で、社会の常識的な枠組みでは理解できない奇妙なLaniは海という混沌に飲まれる一方で、彼女は道連れに入った混沌から這い出て、社会との妥協点、つまり、現行の認識システム内に居場所を見出すと考えられよう。

こうしてみると、Laniはまるでバランスを失ったClaireの補完物のようである。Claireが有意義な主体になり、アイデンティティを再形成する過程で、アイデンティティのひずみとして浮かび上がり、そして再び承認可能な実体にはなりえないものとして排除されているようだ。しかし、もしもそうであれば、TonyやScottらによるバッシングの排除と違うといえるであろうか。アイデンティティを「主張しない」のではなく、アイデンティティを否定され、語ることもすらなく洗い流される*The Small Rain*と同じ状況に戻ったのだろうか。

ここでLaniのもう一つの謎に触れる必要がある。タイトルと同じ「Laniに何が起こったのか」に関する謎である。Claireは、Laniが弱々しく海に沈んでいくのを目撃する。が、それを最後にLaniは姿を消してしまうのである。死体が見つからないだけかもしれない。しかしまた、このバッシングを契機と捉えて利用し、自ら姿を消したかもしれないとも示唆されているのである。つまり、Laniが最初から最後まで被害者であったのか、あるいはある時点からこの機会を利用したのかはわからず、警察による捜査もすぐに打ち切られるため、この出来事も「事件」として分類されず法的な裁きも公式な登録もないままなのである。出生証明書がなくアイデンティティもわからないのと同じように、Laniをめぐる事件は分類も登録もされず、解釈の交錯する場として保留になっているのである。

この保留の状態に、少なくとも二つのことを読むことができる。ひとつは、

Lani はただ排除されたのではなく、この事件のなかでさえ何らかのエージェンシーを持っているかもしれないということだ。排除は一方向的に完結しておらず、従って、排除したはずのものが、別の状態で（外部の他者として、同時に、自己の内部のひずみとして）戻ってくるかもしれない。Claire は Lani が天使ではないかと考え出し、「いつ天使に会っているともわからないから、誰にでも親切に」（307）しようと考えている。しかし、もっと不吉なものとして戻ってくるかもしれないのだ。Lani の存在をブラックホールとして検討してきたように、理解可能な「常識的な枠組み」に入らないものは「ない」のではなく、なんらかの表れの在 / 不在として影響を与えているとしたら、Lani の行方やこの事件の解決不可能性もこうしてすでに周囲に影響を及ぼしていると考えられる。

そして、このことがもう一つの可能性に結びついている。前述のように、小説では Lani に向ける態度の違いにより賞罰が与えられており、それを結末として読むこともできる。しかし、「誰にでも親切に」とか「ゲイ・バッシングはいけない」といった教訓に落ち着かせることは、再び説明可能な「常識的な枠組み」の内部の安定を指向し、その領域からこぼれ落ちるものを排除してしまうだろう。Lani の事件と Lani 自身の存在が保留のままである限り、物語は様々な解釈する可能性を残したオープンなものであり、従って、この「結末」も一時的なものに過ぎないのである。その意味で、多文化主義的な行動をした主人公の立場も自己機能のバランスも、保証されたものにはなりえない。解釈の枠組みを安定させないことは、これほど不安で可能性のあることなのだ。

YA 小説における「多様性」は、その短い歴史のうちで、マイノリティのアイデンティティを否定することによって登場人物が成長する小説から、マイノリティのアイデンティティを承認することで成長する小説へと大きく変わってきた。多くの YA 小説とその批評がアイデンティティによる多様性を当然のように扱っているが、しかし、アイデンティティを基盤にする多様性が問題含みである限り、別の角度からの検討も加えていかなければならない。アイデンティティを固定せずまた解釈を安定させない *What Happened To Lani Garver* の試みは、この意味で YA 小説における多様性のもう一つのチャプターに貢献するものといえるだろう。

#### 引用文献（日本語訳はすべて筆者）

Adams, Henry E., Lester W. Wright Jr., and Bethany A. Lohr. "Is Homophobia Associated With

- Homosexual Arousal?" *Journal of Abnormal Psychology* 105. 3 ( 1996 ) : 440-445.
- Glasgow, Jacqueline N. "Teaching Social Justice through Young Adult Literature." *English Journal* ( 2001 ) : 54-61.
- Hall, Stuart. "Encoding, Decoding." *The Cultural Studies Reader*. Ed. Simon During. London: Routledge, 1993. 507-517.
- Hammons, Everyn. "Black (W)holes and the Geometry of Black Female Sexuality." *Feminism Meets Queer Theory*. Eds. Elizabeth Weed and Naomi Schor. Bloomington: Indiana University Press. 1997. 136-166.
- Jagose, Annamarie. *Queer Theory: An Introduction*. New York: New York University Press. 1996.
- L'Engle, Madeleine. *The Small Rain*. New York: The Vanguard Press, 1945.
- Lipsyte, Robert. "For Teen-Agers, Mediocre?" *New York Times* May 18, 1986:B15.
- Marshall A George, Andi Stix. "Using Multilevel Young Adult Literature in Middle School American Studies." *The Social Studies* 91.1 ( 2000 ) :25-31.
- Nissman, Cara. "YOUR S.T.U.F.F; Treat yourself to frightening fiction; Get in the Halloween spirit by reading these spooky tales." *Boston Herald* 28 October 2002: 30.
- Peters, Julie Anne. *Luna: A Novel*. New York: Little Brown and Company, 2004.
- Plum-Ucci, Carol. *What Happened to Lani Garver*. New York: Harcourt, 2004.
- Scott, Joan W. "Multiculturalism and the Politics of Identity." *The Identity in Question*. Ed. John. Rajchman. New York: Routledge, 1995. 3-14.
- "What Happened to Lani Garver. ( Book Review )" *Kirkus Review* 70. 17 ( 2002 ) :1318.
- 竹村和子 『愛について』岩波書店、2002年